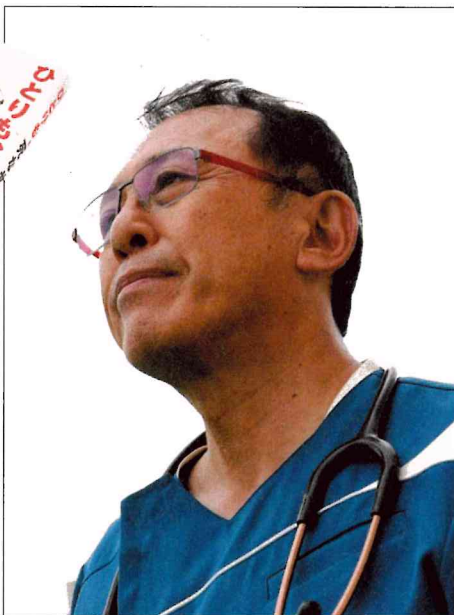


長尾和宏

『ひとりも、死なせへん』コロナ禍と闘う尼崎の町医者、551日の壮絶日記』



兵庫県尼崎市の町医者。長尾クリニック院長。コロナ禍では院外に発熱外来を設け、行き場のない多くの患者を受け入れた。本書では、コロナを含めた外来と訪問診療をこなす怒涛の日々が描かれる。

コロナの真実を 治療現場から 伝え続けた医者

コロナ禍で「医療」に「医者」に不信感をもった読者はいるだろうか。私は正直、絶望した。これまで多くの医療現場取材してきたが、コロナが発生してから診療拒否をした医者が少なくなかった。補助金をもらいながら実は患者を受け入れていない幽霊病床も話題になった。分科会や医師会は「気の緩み」という言葉で、感染拡大も医療逼迫

も、すべてを国民のせいにした。コロナ禍で希望を失った人に本書を手にとってほしい。自称、くっついたいな町医者、の長尾和宏医師は、コロナ発生当初に発熱外来を立ち上げた。これまで約1200人のコロナ患者と関わり、そのうち入院できず在宅療養を余儀なくされた約600人を24時間態勢でフォローしてきた。本書は、2020年1月か

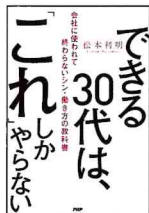
ら21年8月までの1年半、長尾医師が更新し続けたブログからコロナ関連の記述を抜粋し、加筆編集したものである。といっても、ただの「治療奮闘記」ではない。たとえば本書では『週刊新潮』21年6・17号で取り上げられた長尾医師へのインタビュー記事に対する同業者からの批判にも真っ向から応えている。同記事で長尾医師はコロナを人災と指摘し、「諸外国とくらべて感染者数も死者数も少なく、あえて言いますが、日本のコロナは「さざ波」でした。だから死亡者を限りなくゼロに近く抑えられたのに、政府と日本医師会は、その有利な条件を活かすどころか、悪い方向に持って行ってしまいました」と述べた。いつどのよう

な問題が発生し、何が人々を恐怖に陥らせたのか。日記によって事実を述べながら、各所の問題提起がされている。それは「医者とはどうあるべきか」の一言に集約される。私は今夏、長尾クリニックに取材でお邪魔したが、コロナ患者も、がんや糖尿病を患う慢性疾患の患者も、次々に押し寄せ、その嵐のような時間に圧倒された。クリニックには複数の医者がいるものの、コロナ対応は長尾医師ただ一人。秒刻みの忙しさの中で一人一人の患者に叱咤激励する診察を目の当たりにした。感染症ではなく、「人」を診ているのだ。そのような長尾医師の矜持が、本書に込められているように感じる。自ずと開業医にコロナが診られないのか、そしてなぜ世界最大級の病床を誇る日本で医療逼迫が起きたのかという問いに対する答えも出よう。

医療業界が見て見ぬふりをし、誰も口にしなかった都合の悪い真実が、長尾医師の日記によって浮かび上がる。同時に、国内でこれほど闘っている医者があるのだから、まだまだがんばれるはず、と読む人を勇気付ける。



『言語が消滅する前に「人間らしさ」をいかに取り戻すか?』千葉雅也・國分功一郎著
ポピュリズムの台頭、右左ではない新たな分断。加速する世界の根本変化について今最も注目される2人の哲学者が、深く自由に語り合う。



『できる30代は、これだけやらない』松本利明著
「永遠の作業員」と「自分らしく活躍する人」の差は何か。人事・戦略コンサルタントが新しい働き方を紹介する。



『今すぐできる! iDeCo つみたてNISA 超入門』中野晴啓、井戸美枝著
「ほったらかしで老後資金が増える」制度が、2022年は法改正でより便利に。セゾン投信創業者と年金のプロがやさしく解説。

> 新刊紹介

制度が消える前に! おトクな生前贈与ガイド

PRESIDENT

毎月第2・第4金曜日発売 2022.1.14号 プレジデント 価格 780円

54期連続
No.1
ビジネス誌

2008年4-6月期～2021年7-9月期
日本雑誌協会調査
(印刷証明書つき部数)

親も子も、日本一

わかりやすい

実家の 相続の

うまくいく鉄則

親の対策&子の対策
この1冊で後悔知らず

節税、不動産、遺言、認知症、死後の手続き…

